

令和3年度 沖縄県振興審議会第3回文化観光スポーツ部会 議事要旨

日時:令和3年8月23日(月)14:03~16:29

場所:沖縄県教職員共済組合 八汐荘 屋良ホール

議題1【第2回部会の振り返り】について

【原田専門委員】

○128ページ26行目のスポーツ振興課の修正文案のうち「スポーツ×観光×文化」という記載について「観光・健康」というのは、並列させるのが難しい。健康を強調するならば、概念的な流れの整合性がとれるよう「スポーツ・健康×観光」に変更してはどうか。

【下地部会長】

○いくつかのところで「推進」という言葉と「促進」という言葉が出てくるので整理をしてはどうか。

○アウトター政策とインナー政策という言葉があるが、計画の中にアウトター政策と書いてしまうとその意味合いが一般の方にはなかなか分かりにくいのではないかと。全体的な表現だと思うが、一般の方が読んで分かりやすい言葉に置き換えることを改めて意識をしていただきたい。

議題2【第4章及び第6章の観光に関する部分】について

【原田専門委員】

○「沖縄のソフトパワーを生かしたツーリズムの推進」ではエコツーリズム、アドベンチャーツーリズム、エデュケーションツーリズムと記載されているが、ここにスポーツツーリズムを入れていただきたい。アドベンチャーツーリズムというのはスポーツツーリズムの中の一部であるため、広めの概念をここにに入れてほしい。

○ヘルスツーリズムという概念も非常によいのではないかと。先ほどスポーツ・健康×観光という意見を申し上げたので、整合性を取るために、ここにはスポーツツーリズムとヘルスツーリズムという言葉を入れていただきたい。

【下地部会長】

○言葉としては、ヘルスツーリズムやウェルネスツーリズムなど、健康とツーリズムを表現する様々な言い方があるので、その辺りの整理も必要である。

○資料7の2ページ目の施策展開のSDGsの関連で満足度を指標にすることについて、前振計の見直しなどでも国から指摘があったかと思う。また、観光人材の育成・確保の成果指標を観光客の満足度で図るとするのは、人材育成からすると関係がないわけではないが、具体的な事業との関係性からは少し遠く感じる。

○観光人材は表に立つ人もいればバックヤードの人もいて、幅広い方々が働いている産業分野であるため、できれば観光人材の視点から評価をする具体的な指標のほうがよい。

【前田専門委員】

○多彩で質の高いサービスを提供できる観光人材育成・確保の成果指標は、観光客の満足度だけというのは少し違うのではないか。

○観光人材の育成や確保、観光従事者の引き上げ方に加え、観光を管轄する行政のレベルアップも含めて、沖縄県全体で観光業界を上げていく必要があり、かなり大きな問題だと思うので、計測の仕方はあらゆる面からしたほうがよい。

【東専門委員】

○MICEエリアを核とした全県的なMICE受入体制の整備ということで、1,000人以上のMICE開催件数とあるが、一方では、ハイブリッドなMICEの開催が増えていくと思うので、その辺の評価指標、成果指標も何か設けておくべきではないか。

○現在の日本では、行政が学ぶ観光と、民間が学ぶいわゆる観光事業経営のMBAを、全部一緒のものと捉えている。

○アメリカでは学問として完全に分かれており、その辺の視点を官民両方に持っていただくというのはとても重要であるため、その辺の本物志向を第6次の観光振興計画の中に入れていく必要がある。

○交通体系、空港などのインフラの問題にバランスよく取り組むためには、都市インフラと観光がリンクする意味でも、文化観光スポーツ部だけでなく、知事、副知事、企画部の皆さんもツーリズムを学問として体系的に勉強することが必要である。

【下地部会長】

○観光政策の人材と観光産業の人材、両方の育成プログラムを、次期観光振興、基本計画で、明確に位置づけていくとよいのではないか。

○MICE施設の成果指標については、ハイブリッドMICEになり、沖縄の目指すべきMICEは大型を取りにいくだけという方向から方向転換することになると思うので、あまり1,000人以上とかにこだわらずに、もう少し中身の議論をしたほうがよい。

【平田副部会長】

○観光の税そのものの審議の進捗状況を聞かせていただきたい。コロナのような感染のパンデミックが起こってしまうと、観光が大打撃を受けて観光業界は大変な状況だが、そうであるならば自助努力として、やはり自分たちなりのストックをどう確保するかに関して議論があったのか。

【富田専門委員】

○アーティスト・イン・レジデンス(滞在型の創作)が世界的には1990年代頃から盛んになってきていて、2000年ぐらいから日本も各地で行われている。数は少なくとも非常に発信力のあるアーティストの目を通した沖縄の魅力を世界に伝えていくという意味では、沖縄はもっとこれに力を入れてもいいのではないかと。

○芸術支援、地域振興、観光といった様々な面でメリットがあるので、ワーケーションやMICE、スポーツのキャンプなど、いろいろな形の観光のひとつとして、アーティスト・イン・レジデンスの推奨を盛り込んでいただきたい。

【東専門委員】

○素案の全体として、新しいツーリズム形態はどんどん入れ込まれているが、それを支えるための観光容量の大きい都市型観光の記述が薄いので加えてほしい。

○コロナ禍の様々な状況により沖縄観光の質はかつてないほど悪くなっていると思うので、那覇市の国際通りをはじめとする中心市街地または北谷町をはじめとする都市型観光をレベルアップしていくものを何か加えていただきたい。

【下地部会長】

○ナイトエコノミーなど都市の機能を生かした都市型観光に加え、公園、道路の規制緩和の流れを踏まえた新しい都市型観光など、いろいろ考えらるがあるので忘れず議論していきたい。

【原田専門委員】

○ヨーロッパでは、脱炭素に向けて都市の在り方を大きく変えようという動きがあるなかで、沖縄の観光は本当にレンタカー頼みなので、今後はカーボンフリーな都市型観光という視点も取り入れていただきたい。

○バスの利便性を高めることもよく分かるが、バス自体、化石燃料で走らないようなカーボンフリーのやり方が重要だと思うので、そういった大きな方向にシフトするようなきっかけになるような言葉が素案の中に入るとよいのではないかと。

【與座嘉博専門委員】

○素案全体の一連の流れ的には、急にこういう表現が出てくるということが結構あるので、一般人や県民が見たときに、ストーリー性がきちんと通してされているのか正直疑問などところがある。

○振興計画の素案自体が、平時を前提として作り込まれていると思うが、実際に足元を見たときに、観光の回復がなければ沖縄県内の経済の回復もないと考えており、こういう素案をつくりながら喫緊の課題に対して今どういう取組をされているのか見解を聞かせてほしい。

【東専門委員】

○沖縄振興計画の中で、沖縄の最も大きな産業であり、且つ、甚大なコロナの被害を受けている観光を次の10年間でどうサポートしていくか書き加える必要があるのではないか。

【下地部会長】

○観光の部分が始まる88ページと89ページの中に、新型コロナで沖縄の観光産業が大きく打撃を受けているということから、プレーヤーをしっかりと育成する視点も含めて、次の10年間で沖縄の観光を担う業界に対する考え方を一定盛り込む必要がある。

【ダルーズ専門委員】

○成果指標のところに、空手を組み込んだ体験型観光プログラムや商品等の開発件数とあるが、空手の場合はビジネスに対する意識、観光やツーリズムに対する意識がとても低いので、開発件数を指標にすると、ただ作ればよいとなって、非常に問題になってくるのではないかと。

○行政がどう空手界に観光を説明していくか、どう取り組んでいくか、もしかしたら空手観光に特化した組織が必要なのか、教えていただきたい。

【下地部会長】

○空手家に直接沖縄に来ていただくマーケットだけでなく、初心者の裾野を広げるための空手体験ツーリズムの両方で進めていくことも必要である。

以上